一般社団法人
日本医療安全学会
JPSCS Japan Society of Clinical Safety

News Letter

2024/11

日本医療安全学会事務局
〒431-319 静岡県浜松市中央区半田山 1 丁目 20－1 浜松医科大学総合人間科学基礎研究棟 306 号室
http://www.jpscs.org/　Email: office@jpscs.org　TEL:053-433-3812　FAX:053-435-2236

目次

01　第 10 回総会大会長報告
05　広報委員会による総会報告
06　編集後記

第 10 回総会大会長報告

東京財団政策研究所 研究主幹
渋谷健司

2024 年 4 月 13 日（土）・14 日（日）、桜が咲き誇る中、東京大学本郷キャンパスにて第 10 回日本医療安全学会学術総会が開催されました。本総会には、547 名（学会員 239 名、非学会員 227 名）という多くの方々にご参加いただき、盛況のうちに幕を閉じました。今回のテーマは「Reimagine～『人間の安全保障』から考える医療安全の将来～」であり、医療が直面する財政の不安や提供体制の課題に加え、ウクライナやガザにおける紛争、経済危機、気候変動、パンデミックなどの「メガチャレンジ」が医療安全に与える影響に焦点を当てたものでした。このような課題に対応するため、国連開発計画（UNDP）の「人間の安全保障」の概念を取り入れ、「国家」ではなく「人間」を中心に据え、個々の生命と健康を守り、信頼を基盤とした連携が医療安全の基盤であるという視点から議論が展開されました。

総会では、7 つのメイン講演、4 つのリサーチ講演、15 のシンポジウム、4 つの一般演題セッション、3 つのランチョンセミナーが開催され、それぞれが大変充実した内容でした。一般演題は口演が 18 題ポスター12 題と意欲的な研究が発表されました。医療関係者や医療安全専門家のみならず、アカデミア、民間、省庁、政治、メディアといった多様な分野からの参加者が集まり、医療安全の未来を再構築するための本

質的な議論が行われました。横倉義武先生（社会医療法人弘恵会ヨコクラ病院理事長)、中村祐輔先生（医薬基盤・健康・栄養研究所理事長）に加え、鶴岡公二氏（一般財団法人国際情勢研究所所長)、安宅和人氏（慶應義塾大学教授・LINE ヤフーシニアストラテジスト)、浜田恵子氏（ジャーナリスト）など、医療以外の専門家も登壇し、ポストコロナ時代の地域医療、データガバナンス、外国人患者対応、働き方改革、メディアと医療安全など多岐にわたるテーマについて意欲的な議論が展開されました。特に、メイン講演では多くの参加者が魅力的な内容に引き込まれ、オンデマンド配信への希望も多く寄せられ、学会終了後に視聴可能な対応が取られ、オンラインの総再生回数は 300 回以上でした。

初日には、大磯義一郎学会長が座長を務めた特別シンポジウム「医療界と司法界の相互理解のためのシンポジウム～手技上の過失～」が開催され、2 日目には「医療安全の未来」と「医療・社会システムの Reimagine」をテーマに公開討論が行われました。これにより、学会は有意義な議論のもとに締めくくられました。年度初めの忙しい時期にもかかわらず、多くの方々にご参加いただき、例年を超える学会外からの参加者も見受けられました。しかし、参加者のニーズに一層応えるため、開催時期や今後のプログラムの再検討が課題として残りました。

本学会の成功にあたり、ご協力いただいた企業の皆様、日夜問わずに迅速に対応いただいた（株）Memento の皆様、そして多くの学生やスタッフの皆様に心より感謝申し上げます。また、会員の皆様、共同大会長の藤井千枝子先生（慶應義塾大学看護医療学部教授)、小林正人先生（埼玉医科大学脳神経外科教授)、副会長の安田あゆ子先生（藤田医科大学病院教授)、岡村世里奈先生（国際医療福祉大学准教授)、藤澤大介先生（慶應義塾大学医学部准教授)、大磯義一郎学会長、そして学会事務局の皆様のご尽力により、この総会が成功裏に終わったことを、この場を借りて心より御礼申し上げます。

第 10 回日本医療安全学会学術総会の開催を終えて

埼玉医科大学　脳神経外科
小林正人

2024 年 4 月 13 日～14 日、第 10 回日本医療安全学会学術総会を共同総会長として開催に関わる機会をいただきました。
代表総会長の渋谷健司先生が本会のテーマを「Reimagine」とされ、医療安全について「人間の安全保障」という視点から未来に向けた取り組みを考えることを提唱されました。壮大なテーマであり、招待・指定講演が主となり大変興味深い講演が集まる一方、演題を多く公募する通常の学会に慣れている私は多少戸惑い、懸念も感じておりました。しかし、渋谷先生のご指摘通り、現在の日本社会は保険システムの脆弱性、社会の分断・格差など様々な問題を含んでいます。健康な方ですら安心な社会とは言い難く、疾患を抱えた患者さんには尚更でしょう。私も医療従事者の一員として、本会では社会全体と医療安全を見直し「Re-imagine」する機会を与えていただきました。近年、幹細胞治療、新たな抗がん剤、医療ロボットなど華々しい医療の進歩がある一方、一つの新たな感染症で瞬く間に多くの命が奪われました。対策は後手に回り、医療従事者は元々過大であった通常の業務に加えて多大な負担がかかりました。医療体制や日本社会のほころびも明らかとなった後に開催する日本医療安全学術総会としてとても重要で適切なテーマであったかと思います。

新型コロナウイルス感染症も 5 類感染症と位置付けされてほぼ 1 年、皆様のご尽力により桜咲く東京大学本郷キャンパスでの対面開催となり、また天気にも恵まれて多くの皆様にご参加いただき充実した大会になったと安堵しております。盛会のうちに開催できたことは、代表総会長の渋谷先生のリーダーシップのもと、共同総会長の藤井千枝子先生、副大会長の先生方、理事・評議員の先生方、さらにご参加いただいた多くの演者、会員の皆さまのおかげと感謝いたしております。また大会運営にご協力くださった協賛企業の皆様と、運営を担ってくださった株式会社 Memento の皆様に心より御礼申し上げます。

第 10 回総会に感謝をこめて

慶應義塾大学看護医療学部
藤井千枝子

渋谷健司総会長と小林正人総会長の賢慮の中、大磯義一郎理事長と運営事務局に導かれながら、私なりに人間の安全保障ということを考えてきました。そのような中、総会最初の渋谷代表総会長講演で、「信頼」という言葉が響きました。

私の幼き頃、高度経済の成長の恩恵をうけ、高さを争うようにビルが建っていきました。高校を増やすための署名が行われるなど、子どもの教育が広がる時代に育ちました。高校の統廃合や、高齢社会になるとは想像もしていませんでした。過去への賞賛を求め続ける人と、時代が違うとは言えずに無力感に陥る人の狭間にいると感じることがあります。命も人材も資材も有限な中、このまま使い捨て文化を続けたらどうなるのだろうか、看護師たちが安全に安心して働けているのだろうかなどの懸念があります。

このような憂いをもつ私に対し、友納理緒参議院議員の看護安全の推進に光明を見出しました。そのほかの演者たちも、適格に課題を示し、解決の手がかりを残し、人への信頼と人間の在り方を伝えてくれた総会でした。私は、人間は文明をつくる知的な存在ですが、生命が育まれる自然の大きな力への畏敬の念を忘れてはならないと改めて言葉にしたくなりました。

本総会は、いくつも魅力的な議論がありました。例えば、外来化学療法の場で働く看護師の安全は、その病院を映し出すサロゲートとなるという河田健司先生の発言から始まった看護部会の報告です。藤澤大介先生、栗原博之先生からも、患者の QOL や医療安全の取り組みの話がありました。さらに、調査を成し遂げた大田えりか先生から、「安全に遂行するための外来化学療法の看護師の適正配置は 4 人以下」という実データをもとに臨床の知が科学として示されました。

また、専門用語は同じものを指し、共有できるが故に、概念として深まり、社会の発展につながってきました。しかし、「アクシデント」という定義が、英語圏で伝わらないという驚きを共有しました。松村由美用語編纂委員長の「アクシデント」や「ヒヤリハット」の用語をインシデントに統一するという提案は、参加者から賛同が得られました。

辰元宗人先生が座長のシンポジウムでは、医療安全管理者が「つながり育ち合う」ための場となりました。もう一人の座長の辰巳陽一先生より適応課題と技術課題について教示があり、改めて組織や自分自身の価値観を見つめました。田仲浩平先生からはサイバーセキュリティの課題提示がありました。新村美佐香理事が重要性を切望した企画の小松原明哲先生の講演では、ヒューマンエラーについて改めて考える場となりました。布施淳子理事らによる働き方革命のシンポジウムも盛会でした。助産部会誕生のお披露目等々・・・医療安全文化の醸成の手がかりに満ちた講演でした。

末筆になりましたが、参加くださった方々に御礼申し上げます。医療安全に貢献されている方々との有意義な時間に満ちた本総会は、桜満開の会場で温かな風に吹かれ、花びらがしなやかに舞っていきました。今は新芽が育ち、次の花を咲かす準備に入っています。

広報委員会委員からみた第10回学術集会の印象記

広報委員　新田雅彦
（大阪医科薬科大学病院　医療安全推進）

第10回学術総会は、2024年4月13日（土）から14日（日）に東京大学本郷キャンパスで「Reimagine～『人間の安全保障』から考える医療安全の将来～」をテーマに開催されました。プログラムは、講演・シンポジウムが35セッション、一般演題13演題、ポスター発表17演題で、一部はオンデマンド配信（5月1日～7月31日）も行われました。500名を越えるの多職種にわたる参加者が集まり、どのセッションも活気が溢れる学術集会でした。

特に印象的だったのは、2 日目のメイン講演「公開討論：医療安全の未来」です。討論では、医療現場での安全対策が「ゼロリスク」を求められる中、現実的な対応が難しく、医療者が疲弊している現状と持続可能な医療安全対策の必要性について議論されました。

まず、友納理緒氏（参議院議員・看護師・弁護士）は、1999 年以降の医療安全対策の歴史を振り返り、Safety II アプローチや患者参画型医療の重要性、医療事故調査制度を含め医療安全と紛争解決の混同の問題、そして無過失補償制度の導入を提案しました。

医師の立場から辰巳陽一氏（近畿大学病院）は、転倒・転落事故の予防に関する医療安全問題が技術課題だけでなく、現場の適応課題として捉える必要性を強調。医療者間の協働と心理的安全性の重要性が指摘され、地域全体で医療安全のネットワークを構築し医療安全の知識を引き継ぐシステムの重要性が議論されました。同じく安田あゆ子氏（名古屋医療センター・藤田医科大学）は、C. Vincent 氏が提唱するリスク対応の 3 つのアプローチを紹介し、医療安全の質向上には総合的質管理の視点から組織全体で取り組む重要性を述べました。看護師の立場から友納理緒氏は、裁判例を挙げ、医療者に非現実的な注意義務が課されている状況を指摘し、持続可能な看護提供体制の必要性を提案しました。患者代表の天野慎介氏（全国がん患者団体連合会）は、医療者と患者のコミュニケーションの障壁を取り除くための心理的安全性の重要性について述べ、医療安全への患者参画の必要性を提言しました。田仲浩平氏（東京工科大学）は、ICT や AI を活用し医療の安全性と効率性を向上させる未来像を紹介しましたが、IT リテラシーや導入コストが課題になるとも指摘しました。

討論では、医療安全を行う者のモチベーション維持についても議論があり、辰巳氏は現場へのフィードバックを重視し、医療者と管理者間の Give and Take の重要性を強調し、適応課題等の解決がモチベーションにつながるとしました。奥村将年氏（愛知医科大学病院）は、医療安全を楽しむ姿勢が有意義な結果を生むと提言しました。また、患者啓発と参加の重要性が再度確認され、成果を共有する必要性が述べられました。

セッションの最後に、大磯義一郎理事長よりサステナブルな医療安全対策に向けた共同宣言として、以下の 5 項目が発表されました。

1. 適応課題と技術課題の認識
2. 教育への取り組み
3. 持続可能な医療安全対策
4. 心理的安全性とコミュニケーションの促進
5. デジタル技術の活用

今回の学会では、多様性に富み、全てのセッションにおいて専門性の高い内容が共有されました。渋谷会長をはじめとするスタッフの皆さまに感謝を表し、次回運営を担当する安田あゆ子先生にエールを送りたいと思います。

編集後記

昨今、世界はかつてないほど多くの危機に直面しています。紛争や経済不安、気候変動による異常気象、パンデミックなど、これらの「メガチャレンジ」は、医療だけでなく社会全体の安全を揺るがしています。こうした不安定な時代において、医療安全もまた、従来の枠組みを超えた視点で再構築する必要に迫られています。第 10 回日本医療安全学会学術総会では、「Reimagine ～『人間の安全保障』から考える医療安全の将来～」というテーマのもと、単なる技術や規制による安全対策を超え、医療者と患者双方にとって持続可能で、より柔軟かつ共感に基づく医療安全のあり方が議論されました。また、大磯理事長による 5 項目の共同宣言は、こうした多面的なリスクに対応するための実践的な指針として発表され、多くの共感と期待が寄せられました。渋谷会長や共同大会長、理事・スタッフ、協賛企業の皆様のご尽力により、この総会が未来への明確な方向性を示す場となったことに感謝いたします。本総会で共有された知見が今後の医療現場に役立つことを期待しつつ、次回の学術総会でもさらに充実した議論が展開されることを楽しみにしています。ご参加いただいた皆様に、改めて感謝申し上げます。

広報委員会（2024 年 11 月現在）
秋山　美紀
石井　宣大
荒神　裕之
堀田　まゆみ
永尾　るみ子
新田　雅彦
水本　一弘
道丸　摩耶
渡邊　清高（五十音順）